



# 2012 TOKYO ANNUAL MEETINGS

INTERNATIONAL MONETARY FUND  
WORLD BANK GROUP

Japanese

October 12, 2012

Address by **CHRISTINE LAGARDE**,  
Chairman of the Executive Board and  
Managing Director of the International Monetary Fund,  
to the Board of Governors of the Fund,  
at the Joint Annual Discussion



## 年次総会演説：これからの道－変わりゆく世界経済、変わりゆくIMF

クリスティーヌ・ラガルド  
国際通貨基金 専務理事

2012年10月12日  
東京

## はじめに－世界が日本に集う

おはようございます。

総務会委員長、総務並びに来賓の皆様、国際通貨基金（IMF）を代表いたしまして、皆様をこうして年次総会にお迎えできましたことを光栄に存じます。東京へようこそ！

まず今朝はこの年次総会に日本の皇太子殿下徳仁親王が出席下さっていることを皆様に報告いたしますとともに、殿下にお礼を申し上げたく存じます。また、我々を温かく迎えて下さった日本の皆様に感謝いたします。さらに、年次総会初参加となります友人ジム・ヨン・キム総裁を心より歓迎いたします。キム総裁が今どのようなお気持ちでいるか良く分かります。私も昨年同じ立場にありましたから。

前回の1964年の東京での年次総会において、当時の池田勇人首相は次のように述べました。「国内・国際を問わず我々全員が直面している重要な課題は、安定した経済成長を促進し、富める者と貧しきも者の格差を改善することである」。古いことわざにあるように「いくらうわべが変わっても、本質は変わらない (*plus ça change, plus c'est la même chose*) 」と言うことでしょう。

日本はそれ以来、大きな発展を遂げました。

私は、昨年地震と津波が甚大な被害をもたらした仙台から先日戻ってまいりました。多くの命が失われ、多くの夢が打ち砕かれました。しかしそれでもなお、私は新しい街の誕生を目にすることができました。日本の人々の国と生活の復興にかける驚くべき努力を、そして勇気と自信を直接この目で確かめることができました。

こうした日本に全世界が感銘を受けています。日本の皆様は、我々が皆理解しなければならぬこと、すなわち、共に立ち上がり一つになることではじめて、今日の混乱を克服し我々の共有する未来を発展させることができるということを理解されたのです。

本日は、世界経済、IMFそして我々全てにとり、我々を待ち受けている未来がどのようなものとなり得るのか、少々お話をしたいと思います。

では、

- *世界経済の変化のペースと規模*
- *これからの道を理解し先導する*
- *IMFの今後についての私の考え*

という以上3点についてお話したいと思います。

#### **A. 絶えず変化する世界—広範囲に及ぶ大きな変化**

周囲で起こっている大きな変化への対処に追われている我々には、1964年の東京年次総会から学ぶことがあります。

当時、加盟国は、明るい新しい世界をそして黄金の時代を前に、ここ東京に集りました。日本は経済復興のただ中にあり世界経済は力強く前進していました。

これまでの歩みを振り返ってみましょう。生活水準は、1人当たり実質GDPで見ると、世界では約3.5倍、日本では4倍、アジア新興国では驚くべきことに9.5倍と大きく向上しています。世界の貿易量は16倍となっています。そして中国を中心にアジアだけでも5億の人々がこれまで20年間で貧困から脱却しました。

そして今日、我々の世界はいくつかの大きなトレンドにより再構築の過程にあります。

まず、人口構成が大きく変化しています。上昇軌道にある経済地域では若者が、先進国や新興市場国・地域では高齢者が多く暮らしています。そしてますます多くの女性が経済活動に参加しています。2035年までに、アフリカは、インドや中

国を超え、世界で最も大きな10億人以上の労働力を有することになります。しかし、その時までには、世界で65歳を越える人々が10億人を突破しているでしょう。

また、経済力が西から東へシフトしています。そして繁栄が北から南へと広がり始めています。新興市場および途上国地域が、世界のGDPの約半分を占めています。1964年は4分の1でした。

コミュニケーションとテクノロジーの革新が、我々の経済と社会を一段と高い位置に押し上げています。無限の結びつきが我々を一つにし、我々一人ひとりの前に何10億もの可能性に通じる門が開かれています。今日、約30億人がインターネット、まさに世界規模のウェブに接続しています。

つまり、世界経済の砂はシフトしているのです。

アジアの強さとダイナミズムは明白です。これは他の新興市場国・地域にも当てはまります。例えば、今年初めにブラジルを訪問した際、ジルマ・ルセフ氏が女性大統領としてその職に就かれ、包摂的成長の追求と格差改善という課題に大きな決意をもって取り組まれていました。かつて大きな苦難の時期を経験したこうした地域から我々が学べることは数多くあります。

欧州もまた、それが労多いものではありませんが、統合という歴史的なプロセスにあります。確かに、ユーロ圏は厳しい試練に直面していますが、発表した政策イニシアティブの遂行を推し進めなければなりません。我々は、深部に至る構造改革とともに、銀行および財政統合の深化が、経済基盤を強化し、より力強くより耐性に富んだ同盟への基礎となると理解する必要があります。

中東もまた移行期にあります。やはり茨の道にあると言えるでしょう。しかし、固い決意と外部からの支援をもって、移行期にあるアラブの行く先は希望の灯台として光り輝くと確信しています。エジプトのモルシ大統領とお会いした際、大統領は強固な民主的な制度に支えられた野心的な経済改革を追求する決意を示し、実行されつつあります。

何十年にも渡り停滞してきたサブサハラ・アフリカも、力強く確実に成長するなど新しい局面に向かっていきます。貧困との長期に渡る戦いに勝利するまでには長い道のりを行かねばなりません。しかし、外部を強くひきつける急成長を見せる「フロンティア・マーケット」の浮上を前に、古いステレオタイプは足早に廃れつつあります。例えば、私が今年に入り訪問したナイジェリアを見てみましょう。ナイジェリアは、長い間、豊かな原油という遺産を浪費してきましたが、今日

では、ダイナミックな改革と強力なリーダーシップに支えられ目覚ましい成長を遂げています。

こうした変化が我々の未来を形づくりつつあります。

しかし、大きな課題も存在します。我々は有頂天になってはいけません。我々の予測が示すように、世界経済の回復力は依然として余りにも弱く、何億という人々の雇用見通しは、あまりにも難しい状況にあります。貧富の差はまだまだ大きく開いています。

我々の楽観的観測が現実のものとなるまでには、大変な道のりが待ち受けているのです。

## B. これからの道を理解し先導する

ここで、2点目である、どのようにこの道のりをうまく進んでいくか、どのようにこの変化に対応するか、という点についてお話しします。

私は、

- 危機を過去のものとする
- 金融部門の改革を完了する
- 不平等を是正し包摂的な成長を築く

という三つのマイルストーンがあると考えています。

### *危機を過去のものとする*

危機を抜け成長を取り戻す事、なかでも失業率問題という厳しい問題を解決する事が最優先課題であることは明らかです。

それを実現するために必要な政策は分かっています。緩和的な金融政策や、成長を損なうことなく中期的に債務を削減する確固として現実的なプランを伴う適切なペースでの財政調整、銀行部門の健全化の完了、そして生産性と成長を高める構造改革です。そしてこれらを、世界需要をダイナミックな新興市場国・地域へと再調整（リバランス）することにより補完する必要があります。

誤解してはなりません。成長なしでは、世界経済の未来は危ういのです。

おそらくこれまでに蓄積された多額の公的債務が、最大の障害となるでしょう。先進国・地域の公的債務は、現在平均してGDPの約110%と、第二次世界大戦以来、最高の水準にあります。このため、政府は信認のわずかな変化に対し極めて脆弱となっています。特に、この問題は、社会プログラムを重視し21世紀のインフラを構築するうえで足かせとなります。加えて、急速に進む高齢化に伴うニーズが更なる圧力となるでしょう。

過去の教訓から明らかなことが一つあります。それは、成長なしでは、公的債務の削減は一段と困難になるということです。そして、多額の債務により成長を達成することが困難となります。

我々の進む道は、狭く長いものとなりましょう。

今重要なのは、熟慮ではなく必要とわかっている政策を実行へ移すこと、そしてあらゆる面で連携することです。プレーヤーは様々ですが、これは一つのゲームであり、ますます複雑化しているものの、それぞれのポジティブな努力を集積し得るゲームです。

#### より良い金融システム

私が考える二つ目のマイルストーンは、より良い金融システムです。これは、現代の世界経済に欠かせないものであることは御存知の通りです。

しかし、危機を招いたシステム、すなわち、古代ギリシャ人ならば、ヒュブリスとネメシスになぞって傲慢な人々が天罰をおびき寄せたというかもしれないシステムを越えたものがが必要です。

一部進展が見られたものの、リーマン破綻時と比べいまなお金融システムの安全性は大きくは向上していません。依然としてあまりにも複雑で、大規模な機関に活動が集中しすぎており、「重要すぎて潰せない」という亡霊に付きまとわれています。まだ今なお続く過剰とスキャンダルが、このカルチャーが大きく変化していないことを伝えています。

そのため、規制の改善、監督機能の向上、国境を越える機関のより適切な破たん処理制度、金融機関への理にかなったインセンティブの付与、競争条件の公平化など、金融部門の改革アジェンダを喫緊の課題として完了させなければなりません。

なかでも、バーゼル

IIIのより良い資本と流動性バッファという課題において特に進歩を遂げています。しかし、合意した改革の実行、そしてデリバティブ、影の銀行、さらに「重要すぎて潰せない」金融機関といった諸問題での一層の進展という面で、モメンタムを失っているのではないかと私は危惧しています。

業界からは、新しい規制に伴うコストを懸念する声が多く聞かれます。この懸念は妥当でしょうか。最近のIMFの分析は、規制を改善することにより、銀行の貸出金利は上昇しますが、その幅は比較的小さいとの見通しを示しています。また、資本バッファを適切なレベルにまで拡大することは、成長を妨げるのではなく、成長を支えることが明らかになりました。また、金融部門の課税の改革は、過剰なリスク選好及びレバレッジの減少に寄与すると期待されます。

要するに、改革に伴うコストは無理のない範囲にとどまるということです。しかし、自己満足に陥るコストはそうではありません。我々は既にそのことを経験しています。

加えて、金融システムは、一段と均衡の取れた世界経済成長への移行を容易にします。現在、世界の貯蓄の約3分の1を新興アジアが占めています。地域の金融市場を発達させることは、この貯蓄を新興アジア自身の裏庭へ、つまり最も必要とする繁栄の淵にある人々へと方向転換することができます。

### 不平等と包摂的な成長

ここで、第3のマイルストーンである、今後の不平等と成長の質についてお話します。これは、政策立案の中でも人に関する側面です。

成長は、世界経済の今後に不可欠なものですが、これまでとは別の成長でなければなりません。無制限なグローバリゼーションの単なる副産物ではない成長です。つまり包摂的な成長です。

最近のIMFの分析によると、不平等の減少がマクロ経済の安定性の向上とより持続可能な成長に関連している事が分かりました。これは、政策へ重要な意味を含んでいます。

これは、財政政策を策定する際、その効果に重点を置くものの、平等の問題に留意することを意味します。調整の負担を公平かつ公正に分かち合い、弱く脆弱な人々を守る事を意味します。全ての人々が信用と金融市場へアクセスできる、



より包摂的な金融を意味します。全ての人々に機会の窓が開かれ、閉じられた場合はその理由が明らかにされる透明性とガバナンスの向上を意味します。

以上のことから、今後の世界経済は、危機を乗り越える、金融システムを改善する、そして、新しい意味での成長を構築することで回転していくのです。

### C. 新しいIMF—新しい世界で加盟国に貢献する

これは、IMFの将来に何を意味するのでしょうか。

連携の強化は、これまで私が述べたこと以上に必要です。相互に結びついた世界は、協力する世界でなければなりません。インドの偉大な詩人であるタゴールの言葉を借りるならば「狭い国内の壁により細分化されていない」世界でなければなりません。

ですから、将来において多国籍機関はこれまでも増して重要となります。

そして、IMFはこのような世界的協調のための第一級のフォーラムだといえます。

今回の危機は我々に変化を起こしました。つまり、新しいアプローチ、新しいツール、新しい意義などの構築です。将来のIMFの骨子が見えてきました。しかし、これはIMFのこれまでの歴史、そして創設者が課した使命の上に築かれています。

では、将来のIMFとはどのようなもののでしょうか？

まず第一に、IMFは常に信頼されるアドバイザーでなくてはなりません。

アドバイスを提供することも受けることも、時に難しいものです。我々は、過去1年間で幾つかの重大な決断を下しました。なかには物議を醸したものもありました。欧州の銀行の資本増強や、より大規模な欧州の金融のファイアウォールの構築、財政調整へのよりバランスの取れたアプローチ、「財政の崖」への緊急な対応などを求めてきました。これらは、難しい要請ではありましたが、困難な時こそ、経済問題を客観的かつ独立した観点から判断し、厳しい決断を下すことこそが我々の仕事です。

今、IMFは前進し、現代の世界経済の変化する現実と優先事項、そして相互に広く結びついた世界に、これまで以上に適応しなければなりません。そのため、我

々は、一国での出来事が他の国へどのように影響するのか、経済及び政策の波及効果を今まで以上に重視しています。

たとえば、我々の新たな「統合されたサーベイランス決定」は、国境を越える影響に光を当て、国レベル及び世界レベルのサーベイランスを相互連結するうえで有益でしょう。我々の新たな「対外部門の安定性に関する報告書」は、為替レートを含め、多国間的視点から政策評価を精緻化します。そして、新たな「金融サーベイランス戦略」は、国と世界の安定性を巡る懸念の中心にある部門に対する我々の焦点を大幅に強化するものです。

*第2に、IMFは、相互関連した世界で、加盟国支援に必要なリソースを備えていなければなりません。*

これまで危機の間に、我々は57の非譲許的融資と69の譲許的融資、合わせて126の融資プログラムに対して5,400億ドルをコミット、1,570億ドルを支出しました。我々は、調整と移行を支援する融資や、問題の波及を防ぐための保険、良い政策を保証するなど様々な国の様々な問題を支援しています。さらに我々は、たとえば、一部の国で財政調整の期間の延長を求めるなど、より柔軟にかつ社会情勢を十分に配慮しながら、このような活動を進めています。

今年初めの、我々の財源を4,560億ドル拡充するという皆様の決定は、IMFへの大きな信頼を反映した結果であり、これによりIMFの融資能力は総額1兆ドルを超えることになりました。また、最近では、金売却に伴う想定外の利益を活用することで、皆様は、貧困削減・成長トラストの今後の譲許的融資のための十分な資金を確保するという低所得国に対する約束を果たしました。

ご安心ください。皆様の投資は、危機を終わらせるため、危機を防ぐため、そして危機が人々にもたらす損失を軽減するために、有効に活用されます。

*最後となりますが、将来のIMFにとり重要な点として、IMFはグローバル・オーナーシップを真に反映すべきだという事をお伝えしなければなりません。*

世界を代表する、世界を映した、そして世界が安全で快適なホームと認識することができるIMFが必要です。

この意味では、2010年に合意した改革は、我々の歴史上で最も大きなガバナンスの改革だと言えます。この結果は、クォータ（出資割当額）がダイナミックな新興市場国や途上国に6%移行することになりますが、これにより前回の2006年改

革の開始から、合計で9%移行することになります。初めて、ブラジル、中国、インド、ロシアすべてが10大出資国に名を連ねることになるのです。さらに、国際金融機関では初めて、全選任制の理事会が誕生することになります。

この改革に向けて大きく前進してきました。これは良いニュースです。我々は、主要なポイントを達成しました。クォータ増額に関する75%以上の賛同を、また理事会の改革に関しては120カ国以上の賛同を得ました。今、我々は、理事会の改革と2010年のパッケージを遂行するために必要な、議決権の85%の賛同を得るために努力しなければなりません。

ゴールは目の前です。後僅かである今ここ東京で再び、ゴールに到達できるよう加盟国の皆様にご協力をお願いする次第です。

総務会委員長、および総務の皆様、これが我々が築いてきたIMFであり、今後も皆様のご支援のもと努力を続けていく所存です。皆様のIMFであり、それは常に全ての人のためにあります。加盟国に貢献し、世界にそして人々に貢献してまいります。

### **終わりに：協力—東京の精神**

本日のお話を終えるにあたり、開催国である日本の皆様に今一度御礼申し上げます。日本は多国間主義と世界的協調の真のチャンピオンです。IMFの友人であり、今年、パートナーシップの締結から60年目という記念すべき年を迎えました。

ワールドクラスの優れたIMFスタッフに深く感謝いたします。加盟国支援に昼夜を問わず働く熱心なプロフェッショナルのグループに、これほど感銘を受けたことはありません。

そして、IMF理事のすばらしい指導と協調的な関係に感謝いたします。また、加盟国の皆様からの継続的なご支援とIMFへの信頼に御礼申し上げます。

最後になりますが、この度の総会の一環として、日本の学生を対象にIMFと世界経済をテーマとしたエッセイコンテストを開催いたしました。素晴らしく感動的なエッセイが多数ありました。入賞された皆さんが今日ここにきています。皆さん、立っていただけますか。

特に心に残ったエッセイがあります。米本奈央さんという若い女性を書いたものです。

奈央さんは、日本歴史上の有名な出来事で、武田信玄と上杉謙信という2人の戦国大名が覇権をめぐる戦ったときの事を書きました。当時特に貴重であった塩が敵方で不足していることを知り、蓄えていた塩を送ったというものです。

これにより、「敵に塩を送る」というすばらしい日本の諺ができました。言い換えるならば、困っている者には、相手が自分と違って自分と同じチームではなくとも、寛大であれということです。困難な時は、お互いを助け合うことが前進する唯一の道である、これがメッセージです。

総務会委員長、および総務の皆様、協力の精神こそが、前進する唯一の道です。私はこの精神を先日、仙台で感じました。これまで1年間、加盟国を訪問した際に感じました。そして今朝再び、皆様の表情の中にこの精神を感じています。

これが我々の総会の精神です。参加された皆様がこの精神を母国に持ち帰られたら幸いです。

ご清聴ありがとうございました。